巻頭言 preface

産学協同に思う

中部大学　学長　**山田和夫**

Kazuo Yamada,
President,
Chubu University

構造的な問題も指摘されて、どうも元気がでない日本経済と、活力を取り戻し、長い好況を謳歌しているアメリカ経済。その背景の一つには、ベンチャービジネスのような新事業を生み出す社会的な風土や仕組みが、うまくできているかどうかという違いもあるのでしょう。新技術の開発ニーズが高まってくるにつれ、企業・大学共に意識や行動が変化してきて、次第に両者の関係も密度が濃くなってきたように思います。

そういうなかで、産業界からも教育の中身や期待する人間像について、いろいろ発言がなされるようになりました。すでにバブルがはじける前の平成3年に、経済同友会が「選択の教育を目指して、転換期の教育改革」、経団連が「21世紀をめざし研究開発体制の確立を望む（大学・国立試験研究機関の充実と科学技術分野の国際貢献のために）」という提言をそれぞれ世に問うています。

当時、私どものような大学人は相当手厳しいご批判をいただくであろうと思いながら、これらの提言を読んだわけですが、その内容が割合に穏当であることに少しばかり意外な感じを受けたものであります。提言は、「われわれ（産業界）が、これまで何でもよいから学生を送り込んでくれ。未完成品のままで送ってくれ。あまり完成品の教育をしてもらうのは困る、というような考え方でいたのは間違いであった。何でもよいから人をよこしてくれという時代は終わった。これからはきちっとした教育をしてから送り込んでほしい。専門教育も大学でしっかり施してほしい」というようなものでありました。理工系のことが中心で、社会科学や人文系の学部のことには触れられていないきらいはありましたが、これは提言の性質上仕方のないことかもしれません。

これに対して大学側の状況はどうか。教育・研究の高度化、個性化、活性化のために、国立私立とも各大学は、あげて大学改革に取り組んでいます。そして、見渡してみると、この改革がどのように、どの辺りまで進行しているかということがつぶさにわかる資料が、各大学から随分沢山出されています。そのなかでも1992年に出された、東京大学の「現状と課題」いわゆる東大白書は、大変面白いし、中身のあるものでした。よくこれだけにまとめたと敬意を表したいと思います。しかし、この東大白書を始めとして、大学からの声ははっきり言って、それぞれの大学が自分たちだけで大学の内側で言い合っている声ばかりのような気がします。つまり、外に向かっての声ではないわけです。

一方、経済界の方はどうか。先ほどの教育についての経団連や同友会の提言も、どうもその傘下の企業に徹底しているとは言えないように思えます。例えば、経団連も同友会も、大学に対して一緒に産学協同をやろうと呼びかけているわけですが、傘下の大手企業の動向はこれに呼応していない。基礎的な研究をどんどんやめて、「研究所」を例えば「開発センター」などと名称を変えてしまう。大学からの研究提携の申し込みも、なかなかスムーズに受け入れてもらえないことがあるわけです。

要するに、対外的な場合と体内的な場合とで、コミュニーションギャップが大きいということです。企業社会でも大学でも、その団体の傘下のほうにまで徹底するのはなかなか難しくて、内なるコミュニケーションギャップがあるわけです。先ず、このコミュニケーションギャップをうずめることから始めなければ、産学間の真の協同は機能しないのではないでしょうか。

それでは、このコミュニケーションギャップをうずめるために、具体的にはどうすればよいか。私は、産学間をつなぐ機関、いうなればリエゾンオフィス（liaison office）とでもいうようなものを設置してはどうかと思います。ここで、例えばベンチャービジネスのためのお手伝いや、起業家による講義等々をプロモートしたりして、産学のお互いが補完し合ってはどうでしょうか。産学協同とは、単に委託研究を出したり、引き受けたりすることではないと思います。真の産学協同は、企業と大学がお互いのレベルを知り合うことから始まると思います。この場合、レベルとは、適正なマッチングのために必要な個性であり、特色であり、いうなれば、双方のappropiate level のことであります。

これからの大学は、知識の伝授の場から知恵の交換の場へと変わっていくと思います。その知恵の交換は、大学内だけでなく産業界、一般社会を含めて広く国内外にわたって行なわれるものです。一つの知恵が世に出るためには、数多くのバックアップが必要で、大学はそのための格好の拠点になりうるのではないでしょうか。そういう意味で、いささか手前勝手を申せば、いまは大学を大切にする社会、大学を中心にする社会のあり方が問われている時であろうと思います。